現代日本語における敬語[1]の命令形

—イロの意味に対する諸用法を中心に—

董　慧穎

はじめに

本稿は、イロの意味のイラッシャイ・イナサイ・イテクダサイを中心として、敬語の命令形における話し手の性別・人間関係・敬意の度合いなどを記述することを目的としている。「敬語の命令形」——これは一見矛盾しているタイトルのように思われるであろう。敬語とは話し手が自分自身のことを低め、聞き手あるいは第三者を「みあげる」言語形式である。命令形とはモダリティ[2]に属するカテゴリーで、**命令・依頼・勧め**（森山卓郎 2000）などをあらわす。敬語の命令形とは、聞き手（第三者を含む）に対する、**みあげ**（敬語の機能）および**拘束**（命令形の機能）がくみあわさったものである。

参考資料には、1914 年の夏目漱石の『こゝろ』をはじめ、1982 年の赤川次郎の『女社長に乾杯！』まで、約 80 年間にわたる小説作品の会話文を中心とし、手紙文なども含めている。小説の会話文は、作家の意識や意見によって加工され、現実の言語表現をそのまま記録したものではない。しかし、それは作家の実生活体験からうまれたものであると考えられ、現実の言語表現の一面を描いたものとして、書き言葉資料の中で、ナマの言語資料にもっとも近いものとみなしうる。

§1　命令形イロ

命令形そのものは、聞き手への直接的要求となる。動詞イルの命令形には、次のような形式がみとめられる（高橋太郎 2000）。

ふつう体の形式		ていねい体の形式	
みとめ形式	うちけし形式	みとめ形式	うちけし形式
いろ	いるな	いなさい	

ていねい体の形式にはイナサイのほか、敬語動詞イラッシャイと分析的なくみたての敬語動詞イテクダサイがある。

命令形イロを用いる話し手はほとんど男性である。女性の話し手によって使用される可

能性がまったくないとはいえないが、既集の資料をみると、性別的に男性に傾いていることははっきりしている。対等関係あるいは目下の聞き手に対して、強制的な命令をくだすようなニュアンスがとても強い。

イロの敬意の度合いについては、前後の文脈とあわせて考えなければならない。たとえば、例1は、デス形式ではなく、<だし／だから>のようなふつう体ダがその前に使用されていることから、聞き手に対する敬意はゼロであることがわかる。例2でも、マス形式ではなく、ふつう体の<行ってみる>、また聞き手を呼びかけるときに<きみ>がもちいられていることから、敬意は含まれていないことがわかる。また、例1)「脅し足して」という描写からも、「その覚悟でいろ」の「イロ」に「おどす」という意味要素を含めていることが考えられる。

1)「聖戦貫徹同盟」「維新公論社」の某と、茨城県「紫山塾」の某と、二名の名刺が添附してあり、海軍罫紙に実松秘書官の字で、この二人がさらに口頭、「山本次官が辞職しなければ、聖戦貫徹同盟は全国に呼びかけて、次官の立場を窮境におとしいれるつもりだし、その他の手段も敢えて用いるつもりだから、その覚悟でいろ」と、脅し足して帰ったということが書いてある。(阿川弘之、山本五十六)　〔男性⇒不明〕

2)「少し手前で停めろ。様子を見る」と大畑が言った。「私が行って――」と尾島が言いかけると、「いや、私が一人で行ってみる。君はここにいろ」と、大畑は抑えて、一人で車を降り、歩いて行った。（赤川次郎、女社長に乾杯！）　〔男性⇒男性　目上⇒目下〕

3)「よし！　それじゃ飽くまで潔白だと云うんだな？」「ええ、潔白だわ」「お前はそれを誓うんだな！」「ええ、誓うわ」「よし！　その一と言を忘れずにいろよ！　己はお前の云うことなんか、もう一と言も信用しちゃいないんだから」それきり私は、彼女と口をききませんでした。（谷崎潤一郎、痴人の愛）　〔男性⇒女性　対等関係〕

また、シテーイロのかたちも対等関係または目下の聞き手に対する、強制的な命令形であろう。

4)「矢部行助という学生がいますか？」と迎えにでた行助に年輩の警官が訊いた。「矢部？……ええ、僕が矢部行助です」　行助は、咄嗟にすべてを理解した。修一郎は、女中と女中の息子に刺された、と警官に告げたにちがいない。このとき、あたふたと澄江が出てきた。「おい、この少年を押えていろ。矢部澄江だな。茶の間はどこだ」（立原立秋、冬の旅）　〔男性⇒男性　目上⇒目下〕

5)「お父様はあたし達のために新しい家をお建てになったのよ。病院の向って左の横手に」と、喜ばしげに得意気に、龍子はこのときはじめて打明けた。「これはお前さまには黙っていろって言われていましたの。あたしが出る前に建築をはじめて……あたしはそんな無駄なことおやめなさってと何度も言いました。でもどんな家ができているか楽しみだわ」（中略）徹吉がややむっとして黙っていると、龍子は晴れ晴れとした顔でなおこう言った。（北杜夫、楡家の人々）　〔男性⇒女性　父親⇒娘〕

上記のように、敬意の度合いはゼロである命令形イロとシテーイロに対して、§2 イラッシャイ・§3イナサイ・§4イテクダサイの順番で、ていねい体のかたちにおける話し手の性別、人間関係および敬意の度合いについて記述してみたい。

§2　イラッシャイ（意：イロ）のかたち

§2-1　本動詞イラッシャイ

命令形イラッシャイは本動詞として、イロ／イケ／コイの意味をあらわす。また、動詞としてのはたらきがよわまり、例えば、客の注意をひくための、あいさつ的な言い方に転じた用法もある。

イロをあらわすイラッシャイ

6)長屋だてのギシギシした板の間をふんで、お君さんの御亭主が出て来た。「こんなところでよければ、いつまででもいらっしゃい。またそのうちいいところがありますよ。」と云ってくれる。（林、放）〔男性・家主⇒女性・来客　高姿勢⇒低姿勢〕

7)「駅長さんもうお帰りですの？」「私は怪我をして、医者に通ってるんだ。」「まあ。いけませんわ。」和服に外套の駅長は寒い立話を切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら、「それじゃまあ大事にいらっしゃい。」（川端康成、雪国）　〔男性・駅長⇒女性・部下の姉　高姿勢⇒低姿勢〕

8)「大丈夫かしら、たい子さんって人、貴女の親友にしちゃあ、随分冷たい人ね、泊めてくれるかしら……」「大丈夫よ、あの人はあんな人だから、気にかけないでもいいのよ、大船に乗ったつもりでいらっしゃい。」（林、放）　〔女性⇒女性　友人同士・対等関係〕

ふつう体命令形のイロと異なり、ていねい体命令形のイラッシャイは話し手の性別が制

限されていない。例6と7は男性による発言であり、例8の話し手は女性である。敬意について、例6にはヨケレバとーマス形式が同時に用いられていることから、家主の男性から来客である妻の友人の女性に対してのていねいな言い方として考えられる。このような場合、イラッシャイは強制的な命令ではなく、さそいかけの用法になる。例7は社会地位の比較的高い男性発話者が相対的に低姿勢である聞き手の女性に対する、ていねいな言い方である。

例8は親しい関係の女性同士の会話である。一般的に敬語の用法には一貫性が存在している。ひとつの述語のところに敬語動詞を使用すれば、同じ場面において、同一話し手のそのほかの述語にも同じ程度の敬語動詞の使用が要求されている。しかし、例8のように、女性の話し手に限って、そのきまりはしばしばくずれることがある。この例8のイラッシャイの敬意の度合いは、ゼロに近いように思える。

イケをあらわすイラッシャイ

9)下からは遊びに行ってもいいかと云うサインを画学生達がしている、すると、この十七の女学生は指を二本出してみせた。「その指何の事よ。」「これ！何でもないわ、いらっしゃいって言う意味にも取っていいし、駄目駄目って事だっていいわ……」（林芙美子、放浪記）　〔女性⇒女性　近隣　対等関係〕

コイをあらわすイラッシャイ

10)「お兄さまに御挨拶なさい、奥の間にいます」お参りを終った時、かよが仏間に来て言った。「保坪兄さんに？」「いらっしゃい」かよは先に立って案内しようとする。（渡辺淳一、花埋み）　〔女性・姉⇒女性・妹〕

11)「おつゆが冷めますからね、早くいらっしゃい」栄子は行ってしまった。それが栄子の弱さだった。産みの親ならば叱り飛ばしてでも連れて行くだろう。栄子にはそれができない。（石川達三、青春の蹉跌）　〔女性・父親の後妻⇒女性・娘〕

12)「宮村さん、またいらっしゃいね。可愛らしい登山家がこのつぎ来るまでに、山の写真を用意して置きますわ」園子は宮村に愛嬌をふりまいていた。（新田次郎、孤高の人）　〔女性⇒男性　ウェートレス⇒客〕

あいさつ的なイラッシャイ

コイの意味の延長だと思われる。「よくいらっしゃった」の意味をあらわしているものの、命令形の形をとっている「イラッシャイ」は、動詞の命令形の異例とも言えるだろう。あいさつ的なイラッシャイには、動詞としてのはたらきがない上に、命令の意味も含まれておらず、ドコドコにイラッシャイのように拡大することができない。元の意味「コイ」の動作性がよわまり、動詞としてのはたらきが実現できなくなっているため、その命令のかたちがあらわすはずの命令性も弱まったと考えられる。

13)「あら、いらっしゃい。」女にしてはややせいの高い、ぐにゃぐにゃしたからだつきの、ぷんと白粉のにおいをさせながら肩から乗り出したのが、仙吉の後にわたしをみとめると斜に身を引いて中腰になり、「あ、お客様。どうぞ。」（石川淳、葦手）

14)「なにかたべる？」と、店のマスターが森川の話のとぎれるのを待って言った。「うん。なにかだしてよ」森川が言うのとほぼ同時に、マスターのうしろからほっそりとした着物姿のきれいな女性が出てきた。歳は三十そこそこというところだった。「いらっしゃい。モリちゃんしばらくね」（椎名誠、新橋烏森口青春篇）

15)ドアを開けると、中にいた、青いドレスの若い女が、太郎の顔を見て怪訝な顔をしたが、それでも、「いらっしゃい」と小さな声で言った。それから、落ち着き悪く、「お一人？」と訊いた。（曽野綾子、太郎物語）

また、イラッシャイに - テクダサイがつづくと、イラッシャッテクダサイのかたちとなり、敬意の度合いはさらに高くなる。ビジネス関係の会話文にはこのような用法がよくあらわれる。

コイをあらわすイラシャッテークダサイ

16)店頭だけで眺めてしまうのはもったいないのでっ！WEB でも期間限定で展示させていただきました。リアル店舗の方は店頭に見にいらっしゃってくださいね！　〔サイトの広告〕

17)きり番書き込みありがとうございました。いつもおいでいただきありがとうございます。特別何もありませんが、また何度でもいらっしゃってください。　〔チャットの管理者⇒サイトの訪問者〕

18)「どうぞ応接室へいらして下さい」と伸子は言った。「お話をうかがいます」「いいとも。たっぷり聞かせてやる」（赤川次郎、女社長に乾杯！）　〔女性・社長⇒男性・来訪者　初対面〕

19)若い奥さんは、そう言いながら、袋の中に五つ入れてしまった。「あのう、僕、四つってお願いしたんですけど」「一つおまけです。又、いらして下さい」「すみません」太郎は外へ出た。（曽野、太）　〔女性⇒男性　店側⇒客〕

イケをあらわすイラッシャッテークダサイ

20)「そこが客間です。お二人はそこにいらして下さい。私が捜してみましょう」三枝が言って、廊下を歩いて行った。純子と伸子は、椅子にかけて、何となく部屋の中を見回していた。（赤川、女）　〔男性⇒女性　部下⇒社長と社長の秘書〕

なお、今回の資料の中には、イロの意味のイラッシャッテクダサイは見られなかった。今後もさらに用例を集めて、検討していく必要があるだろう。

§2-2　補助動詞シテーイラッシャイ

補助動詞シテ‐イラッシャイは命令／すすめ／うながしなどをあらわす。

21)「帯子さん、まあお静かに……」とたれかの声がした。「お黙んなさい。」とたんに帯子はその声のほうへふりかえって、まったくちがった烈しい調子で、「ここで、あなた方は何をいうことがあるんです。勝手に愉しく『マルスの歌』のおしゃべりをしていらっしゃい。……」（石川淳、マルスの歌）　〔女性⇒多数〕

この用例での発話者の発言にはあなた方／アルンデスのような敬語的な言い方が用いられているが、敬意は認めにくい。シテイラッシャイは一般的な命令形である。今回の資料の中で、このような用例は一例のみであった。

22)松田さんが、妙に大きいセキをしながら窓の下を通ったとおもうと、台所からはいって来て声をかける。「もう御飯ですか、少し待っていらっしゃい、いま肉を買って来たんですよ。」（林、放）　〔男性⇒女性　対等関係〕

23)「おい、ほんとうにお前……」「又始まった！譲治さんがそんな眼つきをするから、あたし尚更からかってやりたくなるんだわ。そんなに傍へ寄って来ないで、もっと離れていらっしゃいよ、指一本でも触らないようにして頂戴よ」（谷崎潤一郎、痴人の愛）　〔女性⇒男性　対等関係〕

24)――いいのよ、お母さんは、と少女が横から引き取って、ねえ汐見さん、あたし是非お願いがあるの。

――いけませんよ、千枝ちゃん。

――いいのよ、お母さんは黙っていらっしゃい。ねえいいでしょう。汐見さん？（福永武彦、草の花）　〔女性・娘⇒女性・母親　目下⇒目上〕

命令をあらわす用法の中には、例22、23、24のような聞き手の進行中の動作に対して、その進行をさしとめ、先の動作と逆方向の動作を指示するというような用法がある。

25)「じゃあ、まあ、ゆっくりしていらっしゃい。外からの旅行者には、実にいいとこですよ」「ありがとうございました」太郎は立ち上って、男のあとを見送った。（曽野綾子、太郎物語）　〔男性⇒男性　初対面〕

26)「まあ、そこらに失礼ながら、あなたの病気があるかも知れない。あなたの症状は離人症というんですが、副次的特徴の一つとして、他人を信用しないことです。つまり自分が信用出来ないからなんで」「じゃ、あなたを信用しろとおっしゃるんですか」「そう睨まないで……いや、今日はここまでにしておきましょう。まあその忘れた期間のことでも考えていらっしゃい。しかしどうしても思い出せなかったら、無理しなくてもいいですよ」（大岡昇平、野火）　〔男性・医者⇒男性・患者〕

例25は年長者から年下の聞き手に対する発言、また例26は医者から患者に対する会話で、両方ともさそいをあらわすていねいな言い方である。

27)お君さんが、不恰好なはり子の犬をひざに抱いて、坊やと私とが立っている姿を撮ってもらう。バックは、波止場の桟橋、林立した古風な帆柱が見えます。「坊や！今日は母ちゃんとこへ寝んねしていらっしゃいね。」「一緒に帰るの……」（林、放）　〔女性・母親⇒男性・幼年の息子〕

例27は若い母親から小さい子供に対する発言である。子供に対する特別な敬語の使い方といえる。こういう場合の敬語は、敬語性が低下していて、一般的な目下が目上に対する敬語とはちがう性質のものである。

28)寝床で当にならない原稿を書いていると、十子が遊びに来てくれた。「私、どこへも行く所がなくなったのよ、二三日泊めてくれない？」羽根のもげたこおろぎのような彼女の姿態から、押花のような匂いをかいだ。「二三日泊めることは安いことだけれど、お米も何もないのよ、それでよかったら何日でも泊っていらっしゃい。」（林、放）　〔女性⇒女性　友人同士・対等関係〕

女性同士の会話では対等関係であっても、敬語表現がよくあらわれる。しかし、例 28 のような場合、前後の文脈に敬語動詞の共起が生じていないので、このシテイラッシャイのかたちに敬意はみとめにくい。敬語的な価値の低下がすすむひとつのパターンである。

29)母は子供のように涙をこぼしていた。「馬鹿ね、汽車賃は、どんな事をしても送りますから、安心してお祖母さんのお世話をしていらっしゃい。」（林、放）　〔女性・母親⇒女性・娘〕

30)「もしちょっとでも触ったら、その時直ぐに止めにするわよ。その左の手をちゃんと膝の上に載せていらっしゃい」私は云われる通りにしました。そして右の方の手だけを使って、彼女の口の周りから剃って行きました。（谷崎、痴）　〔女性⇒男性　対等関係〕

例 29 は母親の娘に対する発言である。例 30 は若い女性の年上の男性に対する発言である。両者とも女性の発言で、発話者が聞き手をうながしていることをあらわす。

§3　イナサイのかたち

§3-1　本動詞のイナサイ

以下の三例はいずれも命令をあらわす表現である。例 31 は医者（院長）の患者に対する発言であるが、イロのていねいのかたちとされるイナサイには敬意は見られない。例 31 と同じく、例 32 も目上から目下に対する用法である。例 33 のような特別な状況のもとでの、目下から目上に対する「イナサイ」の使用も見られる。その特別な状況は複雑な人間関係によって支配され、公ではない場合に限定される。

31)「ああ君か。君はもうじき退院できるよ。ぼくが、オーソリティが保証するのだから大丈夫だ。まあ大船に乗った気でいなさい。ところで君、なんだよ、入院料はやはりちゃん

と払わなけりゃいかんよ。……」（北杜夫、楡家の人々）　〔男性・医者・院長⇒男性・患者〕

32)母から手紙が来た。――お前にはなにか変ったことがあるにちがいない。それで正月上京なさる津枝さんにお前を見舞って頂くことにした。その積りでいなさい。（梶井基次郎、冬の日）　〔女性・母親⇒男性・息子〕

33)「私帰るわ。」「帰れ。」「もうしばらくこうさしといて。」「それじゃ僕はお湯に入って来るよ。」「いやよ。ここにいなさい。」（川端、雪）　〔女性・芸子⇒男性・客〕

§3-2　補助動詞シテ - イナサイのかたち

例 34，35 は男性の発言、例 36，37 は女性の発言である。男性発言の用例は目上から目下に対するもので、命令をあらわしていることがもっともはっきりしている。例 36 にみられるような、秘書から社長に対してシナサイのかたちをもちいることは一般的には許されないが、同じ年齢と友人同士、この二つの間柄からの特別な用法として考えるしかない。例 37 は対等関係の女性から男性に対する発言で、対者敬語のマス形式が用いられているものの、敬意は見られない。

34)名前は覚えておりませんが、東京辺からいらしていた将校の方が、今は幾ら何しても分らないから、軍の通知があるまで郷里へ帰っていなさいと云われ、氷砂糖とお茶を接待して下さいました。（井伏、黒）　〔男性・将校⇒女性・百姓　高姿勢⇒低姿勢〕

35)「無理するな。ここは、おれが出してやる」父の正二郎が言った。「お前と母さんは、朝早い新幹線で行って、向うで受けとる準備をしていなさい」（曽野、太）　〔男性・父親⇒男性・息子〕

36)「いいから。社長は大きく構えていなさいよ」と純子は冗談めかして言った。（赤川次郎、女社長に乾杯！）　〔女性・秘書⇒女性・社長　友人関係〕

37)「じゃあ、そこにそうしていなさい。私はお先に眠ってしまいますから」園子は上目遣いに蚊帳の外にいる宮村の方を睨んでから眼をつぶった。（新田次郎、孤高の人）　〔女性⇒男性　対等関係〕

§4　イテ - クダサイのかたち

§4-1　イテ - クダサイのかたち

例7の「大事にいらっしゃい」の用法に近い用法である。

38)「あら、そんなことはないわ」「まあ、又、ちょくちょく帰って来ますから、元気でいてください」（曽野、太）　〔男性⇒女性　対等関係〕

39)「よろしい」と先生が云った。「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。然し私の過去はあなたに取ってそれ程有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増かも知れませんよ。それから、――今は話せないんだから、その積りでいてください。適当の時機が来なくっちゃ話さないんだから」（夏目漱石、こころ）　〔男性⇒男性　高姿勢⇒低姿勢〕

§4-2　シテ - イテ - クダサイのかたち

例40と41とも、目上から目下に対する発言である。会社という公の場において、性別や年齢などの要素よりも、発話者と聞き手の社会地位が優先されていることがはっきりしている。例42はビジネス関係の男性同士の発言である。

40)伸子は立ち上がって、「じゃ、すみませんけど、幹部会議の方はみなさんで続けていてください」（赤川、女）　〔女性・社長⇒多数・部下　目上⇒目下〕

41)「でも、あまり他の社員の目につかないようにして下さいね。それからこのマンションのことも黙っていてください。みんなを刺激するのは避けたいから」「かしこまりました」（赤川、女）　〔女性・社長⇒男性・部下〕

42)「今日中になんとか連絡を取って、その結果を明日の午前中までに電話でお知らせします。細かいところは、そのあとで文化放送や柳さんたちと会って決めるといいと思います。明日、午前十一時半から十二時まで、ホテルの部屋で待っていてください。その間に、必ず電話をします」（沢木耕太郎、一瞬の夏）　〔男性⇒男性　ビジネス関係〕

シテ - イテ - クダサイは高姿勢の発話者から低姿勢の聞き手にたいする会話（例43, 44）に用いられるほか、目下から目上（例45、46）に対する発言の中にも使われている。命令をあらわしてはおらず、すすめの表現である。

43)「おかみさん、僕はこれから出かけて来ますが、もし行き違いに戻って来ても、僕が帰って来たことは何卒黙っていてください、少し考があるんですから」そう云い捨てて、私は表へ飛び出しました。（谷崎、痴）　〔男性・客⇒女性・女将〕

44)それが私の煩悶や苦悩に向って、積極的に大きな力を添えているのは慥ですから覚えていてください。（夏目、こ）　〔男性・先生⇒男性・私　手紙文〕

45)「……それなら、おふくろに、今、一応、姉たちの所へ行っていてくださいって、頼んだんだけどね。おふくろはおふくろで、ここは私の家だから、何で出て行かなけりゃ、いけないことがある、とこうでしょう」（曽野、太）　〔男性・息子⇒女性・母親〕

46)産婆はそういった。「文太郎さん、赤ちゃんが生れたら起すから、あなたは休んでいてください。お産には男の人はなんの役にもたちませんから」（新田、孤）　〔女性・産婆⇒男性・家主　低姿勢⇒高姿勢〕

イテ - クダサイはイナサイより敬意の度合いが高い表現として捉えられる。例 47 以下の三例には、「帰宅なさる／お休みになる／安心なさる」のような文法的にかたち付けられた敬語動詞につづく用法があらわれた。

47)〈岡みどりが出て来たので尾行します。帰宅なさっていてください。電話します。谷口〉（赤川、女）　〔男性・刑事⇒女性・協力者　メモ〕

48)「社長はどうぞ家でお休みになっていてください。わざわざ出社して来られるには及ばないでしょう」（赤川、女）　〔男性・元部下⇒男性・元社長〕

49)「まさか。水戸黄門じゃあるまいし。――ともかく、奥さんは安心なさっていてください。必ず何とかいたします」（赤川、女）　〔女性・社長⇒女性・部下の妻〕

§4　まとめと問題点

1. イロをめぐって、敬語表現イラッシャイ、イナサイ、イテクダサイの用法をまとめてみた。補助動詞としてはたらく場合、ひたすら一般動詞とくみあわさるイラッシャイ、イナサイとくらべ、敬語動詞とのくみあわせが実現するイテクダサイのほうが、敬意の度合いが高いと考えられる。

2. 敬語における命令表現の敬意の度合いを考えるとき、上下の文脈にたよらなければならない。特に女性の発言では、その場面のその他の述語には敬語表現が用いられていない場合、敬意の度合いがゼロであることが多い。

3. 一般動詞の命令形がもっぱら目上から目下に対するのにもちいられるのに対して、敬語表現においては、目下から目上に対する用法（例 24、36）がある。ただし、そのような用

例は少ない。

4. また、ほとんどふれなかったが、終助辞ヨ、ネ、ナがともなわれる場合、命令形のモダリティが緩和する（例 8、15、23 など)。

なお、社会変化にともない、敬語の言葉づかいにもすくなからぬ変化が生じてきている。例えば、「(手紙を）とうとう椽鼻へ出て腰をかけながら丁寧に拝見した」(夏目漱石『坊ちゃん』、1906 年）のような、地の文での敬語の用法は現在ではほとんど見られない。日常の会話においても、現在使用されていない用法がある。このようなこともふくめて、今後も研究を進めていきたい。

注

[1] 国文法では、敬語を**尊敬語・謙譲語・丁寧語**のように分けている。しかし、このような分類方法は言語学界では問題視されている。たとえば、A　先生はいらっしゃいますか？　B　先生はいらっしゃる？

国文法では、動詞イラッシャルについて、AもBも尊敬語として解釈される。しかし、Bには話し手から聞き手に対する敬意は見られない。これは三分法ゆえの問題点である。

会話文においては、かならず話し手、特定あるいは不定の**聞き手**と話題の中の人物いわゆる**第三者**が存在する。その第三者が話し手または聞き手と重なって、話し手と聞き手のみ存在する会話も多い。話し手は敬語をもちいることによって、聞き手と第三者の両者ともに敬意をあらわすことができるが、両者のどちらかだけに敬意をあらわす用法も多くある。よって、敬意の対象をはっきりさせる分類方法でなければならない。

松下文法では、敬意の対象を明記した分類法がとられている。松下大三郎（1924)『標準日本文法』では、敬語を待遇として取り上げ、名詞の待遇を自体待遇（「伊藤さん」など)、所有待遇（「お心」など)、主体待遇（「仰せ」など)、客体待遇（「拝見」など）のようにわけ、動詞の待遇を主体待遇（「行き給ふ」など)、客体待遇（「さしあぐ」など)、所有待遇（「お寒い」など)、対者待遇（「－ます」など）のように分けている。

筆者の修士論文では松下文法を参考したうえ、敬語を**主体敬語**、**客体敬語**、**対者敬語**と分類し、考察をこころみている。

[2] モダリティ（modality、ムード mood という用語を同じ意味で使う研究者もある)：言語活動の基本単位としての文の述べ方についての話し手の態度をあらわし分ける、文レベルの機能・意味的カテゴリーである。その文の述べ方、たとえば、意志を表明するのか、聞き手に行為を要求するのか、事実として確認されたことを伝達するのか、というような選択のことをさししめす。文の伝達的なタイプとは、そうした文のモーダルな意味を類型化したものであり、モダリティとは、モーダルな意味とそれを表現する文法形式の関係の体系である（安達太郎 2002)。

参考資料　(『新潮 100 選』(CD-ROM)より)

夏目漱石　『こころ』、1914 年

谷崎潤一郎　『痴人の愛』、1925 年

梶井基次郎　『冬の日』、1927 年

林芙美子　『放浪記』、1930 年

石川淳　『マルスの歌』、1938 年

川端康成　『雪国』、1935~47 年

小林秀雄　『真贋』、1951 年

大岡昇平　『野火』、1952 年

福永武彦　『草の花』、1954 年

北杜夫　『楡家の人びと』、1961~63 年

阿川弘之　『山本五十六』、1964 年

石川達三　『青春の蹉跌』、1968 年

新田次郎　『孤高の人』、1969 年

渡辺淳一　『花埋み』、1970 年

曽野綾子　『太郎物語』、1978 年

沢木耕太郎　『一瞬の夏』、1980 年

赤川次郎　『女社長に乾杯！』、1982 年

椎名誠　『新橋烏森口青春編』、1985 年

立原立秋　『冬の旅』

参考文献

松下大三郎 1924『標準日本文法』紀元社

高橋太郎 2003『動詞　九章』ひつじ書房

宮崎和人,安達太郎,野田春美,高梨信乃 2002『新日本語文法選書 4　モダリティ』くろしお出版

言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論（資料編)』むぎ書房

蒲谷宏,川口義一,坂本恵 1998『敬語表現』大修館書店

森山卓郎,仁田義雄,工藤浩 2000『日本語の文法 3　モダリティ』岩波書店

林四郎,南不二男編 1974『敬語講座 10　敬語研究の方法』明治書院

言語学研究会編 1992『ことばの科学』5 むぎ書房